「森三郎の作品を読む会」通信　第17号

2013年11月8日　発行

森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

10月の「森三郎の作品を読む会」では、
『赤い鳥』昭和7年8月号初出作品
「蛙」（森三郎童話選集「夜長物語」所収）
「いたちの手ぬぐひ」（森三郎童話選集「かささぎ物語」所収）
を読みました。

今回は二作品のうち、「蛙」について一つの考察をしたい。

「蛙」は「柳に蛙」の図柄でよく知られている平安時代の書家・小野道風を主人公にした童話である。この作品は、鈴木三重吉に「とても傑作です。表現もすっかり整頓し、もう手ばなしで歩ける形です。」と褒められたことが、酒井晶代氏によって紹介されている（「森三郎童話選集　かささぎ物語」解説）。10月の「森三郎の作品を読む会」では、三重吉の賞賛した点が今一つ分からないという話になった。その後この作品の題材について、いくつか分かった点がある。

小野道風についての書に関する説話は「古今著聞集」や「江談抄」で見ることができたが、十五歳くらいのまだ書に目覚めない頃のいたずらな少年の話は、何か典拠があるのかと不審だった。春日井市道風記念館に問い合わせたところ、落合哲館長が「それは創作だと思います」と答えてくださった。そもそも、柳に飛びつく蛙を見て発奮した話は、江戸時代の創作で、三浦梅園の「梅園叢書」に出ているとも教えていただいた。調べたところ、刈谷市中央図書館の村上文庫の中に和綴じ本の「梅園叢書」があった。（活字本では「日本随筆大成」第一期十二巻にある）

「学に志し芸に志す者の訓（おしえ）」として「かえる」が何度も柳に飛び上がろうと試みて、とうとう柳の枝に移ったのを見て、「道風是より芸のつとむるにあることをしり、学んでやまず、その名今に高くなりぬ。」と結んであった。

この話は三期「尋常高等小学国語読本」巻三（二年生）に載っている。三期は大正七年から昭和十五年使用の教科書で、大正六年に亀城尋常小学校に入学した森三郎は、大正七年は二年生なのだから「をの　たうふう」の話はこのころから知っていたはずだ。読本では「たうふうは　これを見て、このかへるのやうに、こんきがよければ、何ごとも　できないことはないと　さとりました。」（分かち書きの空マス省略）と書かれている。

ところが森三郎の「蛙」では、道風は、はえを糸でくくって柳の枝につり下げ、蛙の目の前にそれをぶら下げ遊んでいる。そして「蛙」に関するあるまじないをすると字が上手になると、いとこや兄にからかわれ、そのまじないをすませて、何だか楽しく書に取り組むようになった話になっている。

「梅園叢書」は、三郎の兄銑三が整理した「村上文庫」の本の中に入っていたのだから、兄から「尋常高等小学国語読本」の話の典拠について聞くこともあったかもしれない。他にも兄銑三の影響を感じさせる点がある。兄好古の名や、同時代の人で後に三蹟と並び称せられる藤原行成の名なども挙げ、史実かと思わせる手法。話の内容も学究肌の兄といたずら好きな弟の取り合わせなど、兄銑三を意識しながらにこにことペンを走らせている三郎を想像してしまう。

この話のポイントは、時代設定を平安時代とし、よく知られた「柳に蛙」を題材にしているにもかかわらず、書家として行き悩んでいた道風ではなく、「赤い鳥」の読者の子どもたちと同じような少年の日常を描いている点にあると思う。このようなところが、鈴木三重吉がこの「蛙」を褒めた理由の一つかもしれない。

次回予定　平成25年12月13日（金）午後1時～3時
『赤い鳥』昭和7年9月号初出作品
「犬」「藤五三郎」「むじなの仇討」